

◆重点普及課題

宮古地区シャコガイ類養殖試験

甲斐哲也

1 目的

シャコガイ類のケジ養殖は、近年県内各地で普及しつつあるが、宮古諸島では実績がないため、養殖試験を行い、平成20年の特定区画漁業権の設定時、地域への普及を目指す。

2 方法

波浪の影響を受けにくく、また盗難防止のため目の届きやすい狩俣湾内の小型定置網周辺を試験地とし、県水産海洋研究センター石垣支所で生産されたシャコガイ類(ヒレジャコ、ヒレナシジャコ)の種苗を養殖用ケジに収容し、生長・生残率等を調べた(協力者：狩俣吉弘氏)。

3 結果

前年度からの生長、生残を表にまとめる。

表1 シャコガイ類種苗の生長、生残の様子

	ヒレジャコ1			備考
	個数	殻長(mm)	生残率(%)	
H17年6月	90	28.5	100.0	導入後すぐ沖出し
H17年9月	81	47.9	90.0	
H18年1月	76	55.7	84.4	
H18年8月	54	88.5	60.0	
H19年5月	32	100.4	35.6	

	ヒレナシジャコ			備考
	個数	殻長(mm)	生残率(%)	
H17年6月	300	27.5	100.0	導入後すぐ沖出し
H17年9月	251	53.3	83.7	
H18年1月	243	71.5	81.0	
H18年8月	219	87.1	73.0	
H19年5月	134	104.2	44.7	

	ヒレジャコ2			備考
	個数	殻長(mm)	生残率(%)	
H17年10月	1000	9.2	100.0	陸上タンクで育成開始
H18年1月	751	15.7	75.1	沖出し
H18年8月	338	40.4	33.8	波浪で一部流失
H19年5月	256	61.5	25.6	

平成17年、最初に導入したヒレジャコ1、ヒレナシジャコは14ヶ月目までは60%、73%と高い生残率であったが、25ヶ月後では35.6%、44.7%まで下がった。ヒレジャコ2は沖出し後半年ほどで波浪で一部流失したものの、33.8%→25.6%の減少率は同期間のヒレジャコ1、ヒレナシジャコのそれよりも小さかった。

4 考察

前年度までは、ヒレジャコ1、ヒレナシジャコについては、生残率が6~7割と高く、狩俣湾のような内湾でも冬季の減耗は避けられると期待したものの、2度目の冬を越した春の測定では、両者とも4割前後まで減ってしまった。自動記録式水温計の記録によると、水温は7月~9月に最高33℃(夜間29℃)、2月に最低15℃(日中20℃)であった。潮通しの悪さによるやや低い透明度なども不利な条件だが、今後の継続試験、新規導入種苗での歩留まりに注目したい。

5 今後の課題

本試験養殖は、特定区画漁業権を取得予定の平成20年度まで継続する。次年度は、ヒレジャコ種苗も導入し、ケジ内での短期養殖後、観賞用として出荷を試みる予定である。また養殖参入を希望するグループが増えたため、個々に対応をしながら特定区画漁業権の申請手続きに入る。



船上での殻長計測。



計測後、清掃したケジ内に貝を再配置。